

第1章 高野町の歴史的風致形成の背景

1. 自然的環境

(1) 位置

本町は、和歌山県の北東部にあって、東経 135 度 35 分・北緯 34 度 12 分に位置している。町域は、東西約 22 km、南北約 12 km、総面積 137.03 km²である。南東部は、奈良県、南西部はかつらぎ町、北部は九度山町、橋本市と接している。

中心集落の高野山から近畿圏の中心都市大阪市へは、直線距離で約 53 km、バス・鉄道（快速列車）で約 2 時間 10 分、県庁所在地和歌山市へは直線距離で約 38 km、バス・鉄道（普通列車）で約 2 時間 30 分の距離にある。

もうひとつの基幹集落^{ふき}富貴地区から奈良県五條市中心部までは自動車で 30 分、バスで 50 分の距離にある。

また、海外への玄関口である関西国際空港へは直線距離で約 40 km の距離にある。



(2) 地形・地質・水質

①地形

本町の地形は、最高峰の陣ヶ峰^{じんがみね}をはじめとする標高 1,000m前後の高い山々が、町界、県界沿いに点在して山地を形成しており、町域の 70.6%が標高 600m以上の高地で、かつ、傾斜度 30 度以上の急傾斜地が 88.2%を占める谷密度の高い地形となっている。

基幹集落である高野山地区は、おおむね台地状の高原で、標高 800mから 850mと比較的標高差が少なく、富貴地区の一部を占める富貴盆地とともに山頂緩斜面となっている。



資料：国土地理院地図

■地形概略図（高野町の地形）

②地質

本町の地層は、大部分が四万十帯の日高川層群に属し、有田川構造線を境に町域の北西隅の一部のみが三波川帯に属する。岩質は、町域の大部分を占める日高川層群は砂岩や頁岩により構成され、チャート等を伴っている。町域にかかっている三波川帯は、結晶片岩等の変成岩により構成される。特に結晶片岩は、中世に一石五輪塔等の石材として使用されてきた。



結晶片岩製の一石五輪塔
明応8年(1499)



資料：和歌山県ふるさと教育副読本 わかやま発見

■地質概略図(和歌山県の岩石分布図)

③水質

紀の川水系として東部に^{にうがわ}丹生川、北部に^{ふどうたにがわ}不動谷川、西部に^{ゆこがわ}湯子川がそれぞれ北の方向に流れ、また、楊柳山に水源を発する有田川水系として南部に^{おどがわ}御殿川が南の方向に流れ、それぞれの川沿いに狭小な平地を形成している。



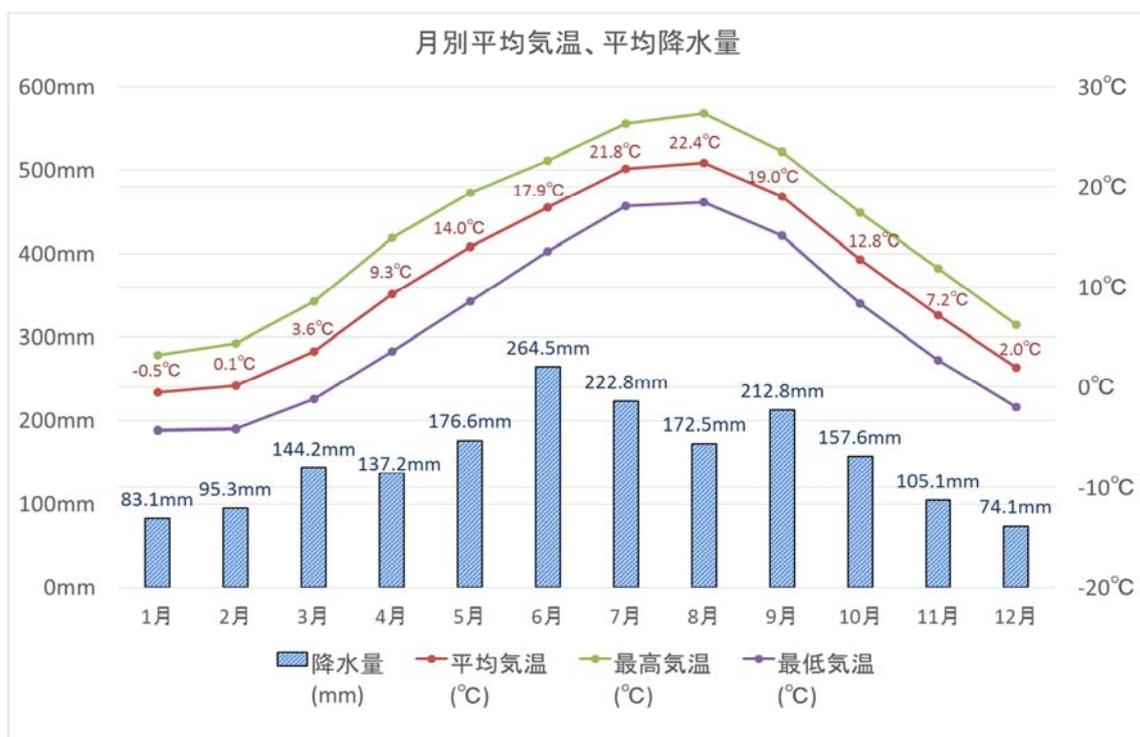
資料：国土地理院地図をもとに作成

■水系図

(3) 気象

紀の川流域は、冬季に比較的乾燥し、夏季に降雨の多い瀬戸内気候に属し、高野山地帯と紀の川地帯とに区分される。高野山地帯に属する本町域は、地域によって多少異なるが、平均気温は 10℃前後であり、紀の川地帯に比べると 5℃ほど低く、冬季には最低気温がマイナス 10℃前後になる日もある。年間降水量は、約 2,000 mm 程度である。降雪量は県内最大規模といえ、例年 10～20cm の積雪がある。時には最深積雪量が 30cm を超える年もあり、冠雪害が発生することもある。

■気温、降水量（1981年～2010年）



資料：気象庁気象統計情報

■高野町の四季



春



夏



秋



冬

2. 社会的環境

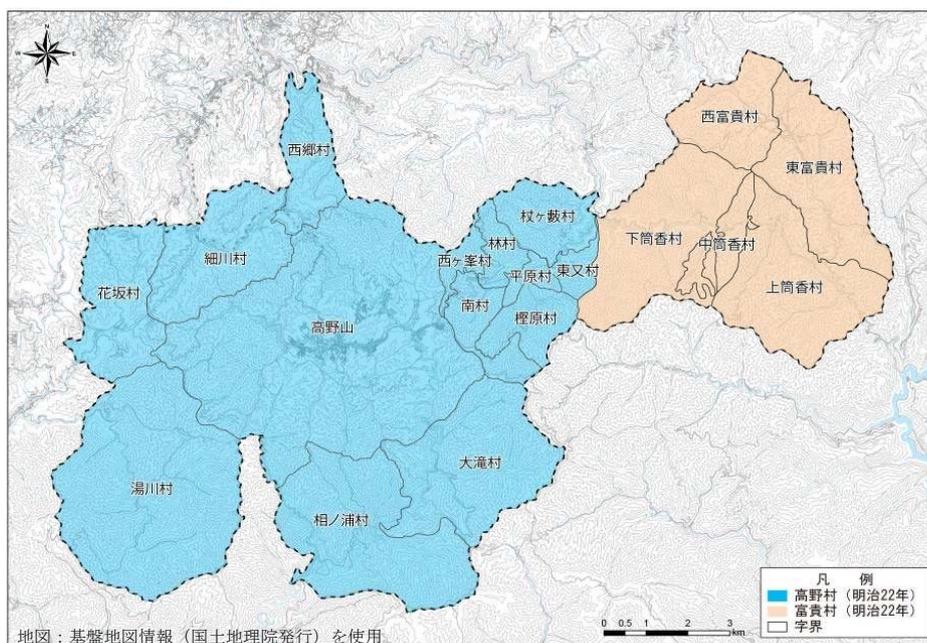
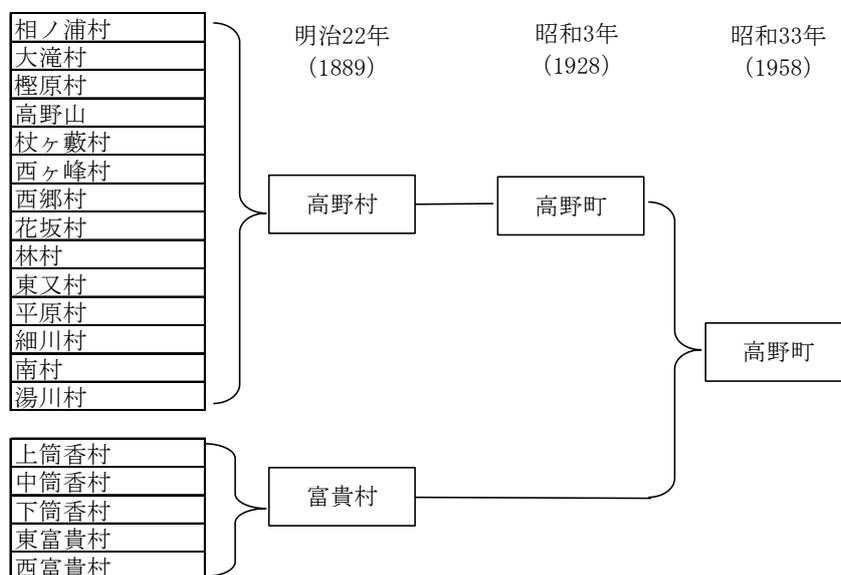
(1) 土地利用

①町の沿革

明治22年(1889)、市制町村制が施行され、相ノ浦村、大滝村、樫原村、高野山、杖ヶ藪村(現在の杖ヶ藪地区)、西ヶ峰村、西郷村、花坂村、林村、東又村、平原村、細川村、南村、湯川村を高野村に、上・中・下筒香村、東・西富貴村を富貴村とした。

昭和3年(1928)、町制を施行し、高野町が誕生した。昭和33年(1958)に町村合併促進法によって富貴村と合併し、現在に至っている。

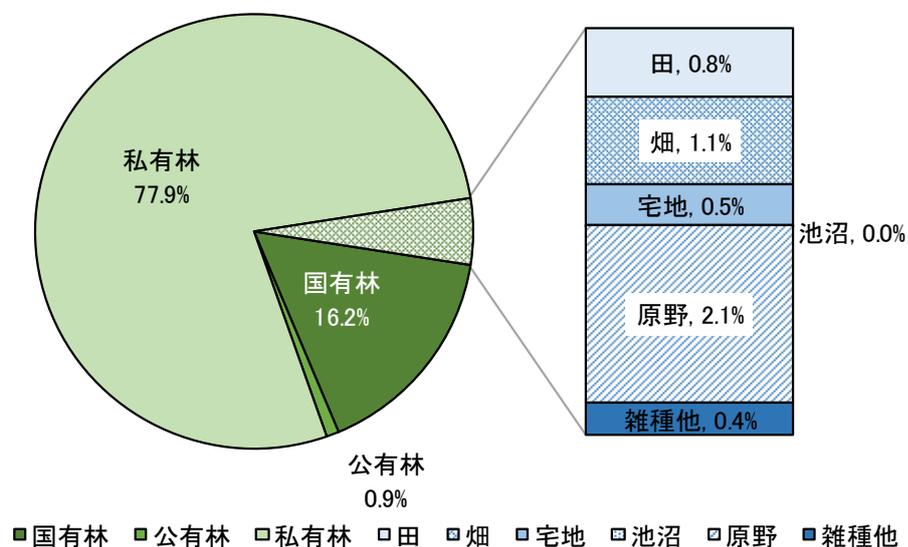
なお、平成に入り、地方行政改革に伴う広域合併が全国的に展開され、再編が進んだ中、本町は平成17年2月の住民投票にて単独町制を選択した経緯がある。



■旧大字区域割図

②土地利用

高野町は、総面積 13,703ha であり、町域の約 95%を森林が占めている。平地部はわずか約 5%であり、農用地面積が約 2%の約 259ha、宅地が 0.5%の約 68ha となっている。



資料：高野町固定資産税概要調書（平成 29 年度）

但し、森林面積は「高野町森林整備計画」から引用

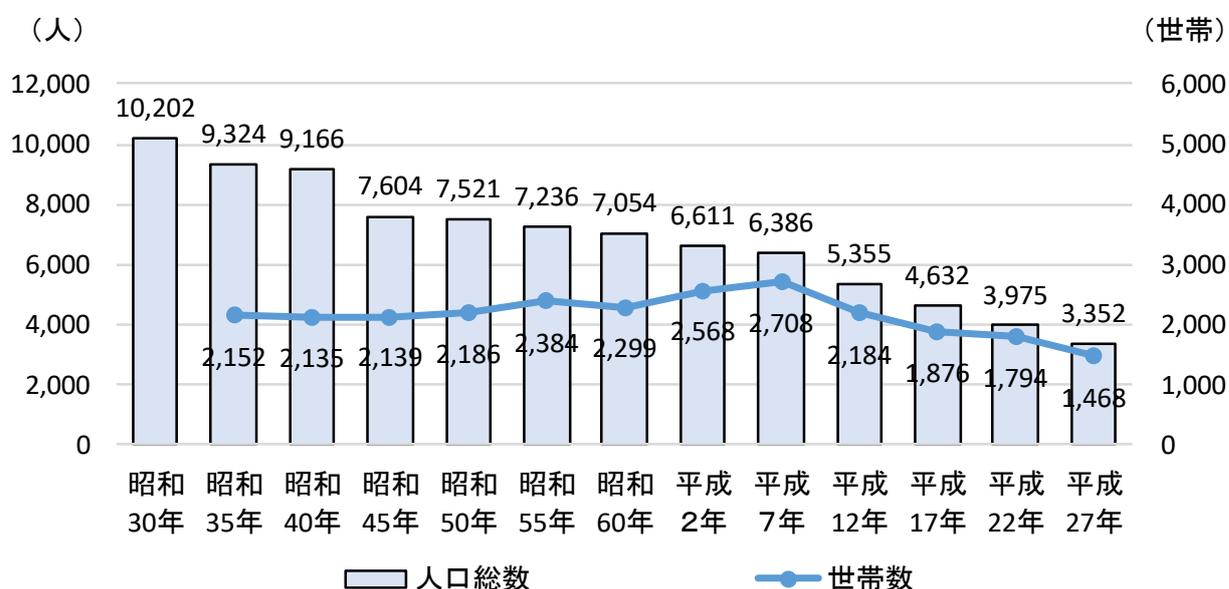
※小数点第 2 位以下を四捨五入しているため、計は 100%とはならない。

(2) 人口動態

人口の推移と動向を見てみると、昭和30年（1955）国勢調査人口10,202人が平成27年（2015）には3,352人と3分の1以下となっている。

町の中心集落である高野山地区には、役場・診療所・銀行・保育所・小中学校・高等学校・大学など行政・社会・教育・文化施設及び商店等の都市機能が集約されている。もうひとつの基幹集落富貴地区も高野山地区より規模は小さいものの、住民の生活に必要な機能が集約していたが、徐々にその機能が縮小しつつある。また、周辺の集落は山間地という地理的条件に加え、地場産業である1次産業の衰退により人口の減少、過疎化高齢化が急速に進んでいる。

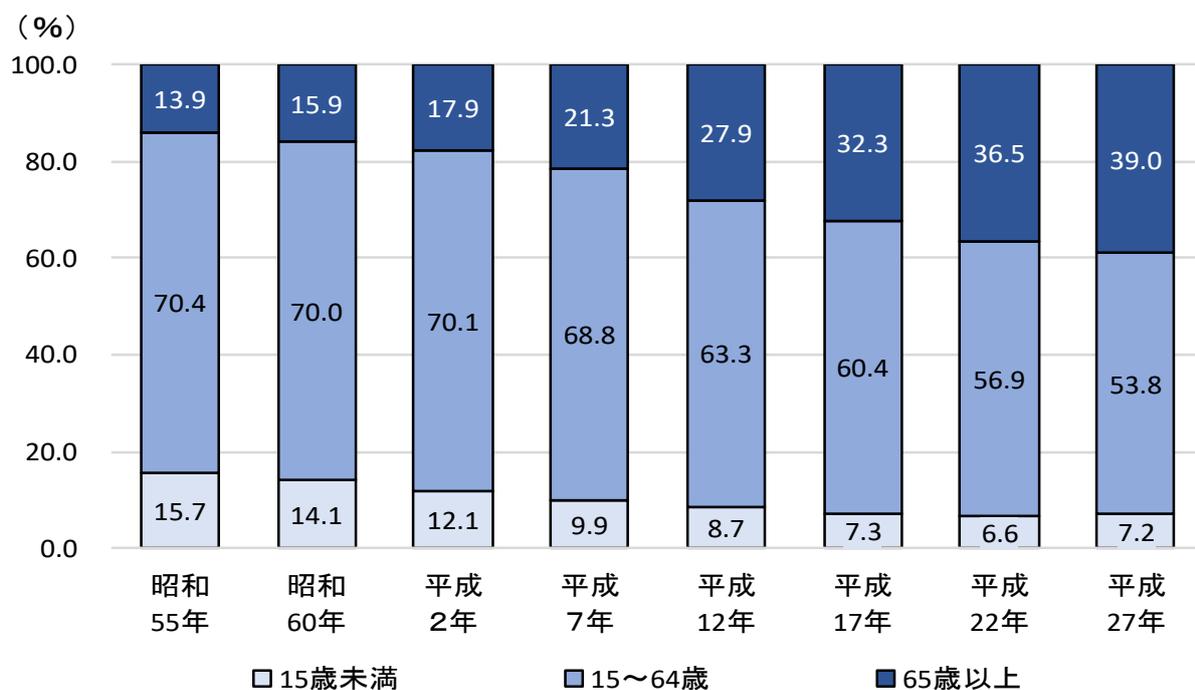
■人口総数と世帯数



資料：国勢調査

■人口3区分と人口構成比

人口構成は「15歳未満」「15～64歳」において減少が続いており、「65歳以上」では平成17年（2005）まで増加が続いている。平成22年（2010）以降にはいずれの年齢層においても減少となっている。特に若年層の減少が顕著で、15歳未満の人口は昭和55年（1980）の1,136人が、平成27年（2015）には242人と約5分の1にまで減少し、15歳～64歳の人口も昭和55年の5,092人が、平成27年（2015）には1,798人と減少している。



資料：国勢調査

(3) 交通機関

本町の公共交通について、鉄道は、南海高野線で難波駅（大阪市）から極楽橋駅まで連絡し、極楽橋駅から高野山駅までケーブルカーを運行している。

バス網について、高野山地区では、高野山駅をターミナルとして奥の院行き、大門南駐車場行き等の路線バスを運行している。また、世界遺産「高野山・熊野」聖地巡礼バス（龍神自動車株式会社と南海りんかんバス株式会社が運行）が本宮（和歌山県田辺市）へ直行バス（4月～11月）を連絡している。

なお、同巡礼バスにおいて、南海りんかんバスの運行区間は、路線バス「高野龍神線」として運行されている。

筒香・富貴地区においては、橋本市及び奈良県五條市まで定時・定路線型の乗合タクシー（愛称、夢たまご・ハイランドタクシー）を運行している。



南海高野線極楽橋駅



資料：高野町長期総合計画から抜粋

■交通網図（公共交通）

道路について、国道 370 号、国道 480 号及び高野龍神スカイライン（国道 371 号）の整備によって、交通アクセスの利便性は大きく向上し、現在では高野参詣・観光に多く利用されている。

高野龍神スカイラインは、高野山を起点として護摩壇山（標高 1,372m）を経て龍神温泉がある田辺市龍神村までを結び、1,000m級の尾根に沿って伸びる全長 42.7km の山岳道路である。高野龍神スカイライン付近一帯の山岳は高野龍神国定公園に指定されている。

その他の主な道路整備としては、平成 19 年（2007）に開通した国道 480 号の整備事業による志賀高野山トンネル（全長 1,070m）、さらに平成 27 年（2015）の高野山開創千二百年記念大法会開催を契機として、渋滞緩和等を目的に開設された高野山地区の南側を東西に走る循環道路「高野山道路」（国道 371 号、延長約 4 km）が挙げられる。



高野龍神スカイライン



資料：国土地理院地図

■交通網図（道路）

コラム

○大阪～高野山にかけて鉄道が延伸されるまで

大阪府方面の区間においては、「高野鉄道株式会社」(明治35年(1902)倒産)が、明治31年(1898)に大小路駅(現堺東駅)から狭山駅までを開通させ、明治33年(1900)に道頓堀駅(現汐見橋駅)から大小路駅間の営業運転を開始した。

高野鉄道倒産後、事業を引き継いだ「高野登山鉄道株式会社」(大正4年(1915)、大阪高野鉄道株式会社に改称)が、大正4年(1915)に大阪から橋本までの鉄道を開通させた。

その後、「南海鉄道」(現南海電気鉄道高野線)が大阪高野鉄道株式会社を合併し、大正14年(1925)に高野山麓の推出駅(現高野下駅)まで路線を開通させ、難波駅からの直通運転を開始した。

昭和4年(1929)に現在の南海高野線終点である極楽橋駅が開通し、翌昭和5年(1930)にケーブルカー(鋼索線)が開通した。この開通により、大阪から高野山上までが鉄道上で直線化され、往来できるようになった。鉄道については、昭和5年(1930)から平成30年(2018)現在に至るまで、大きな路線変更や延長が行われていないことから、ケーブルカー開通によって、難波駅から高野山に至るまでの鉄道の運行体系が完成されたとみられる。



ケーブルカー

地図：基盤地図情報(国土地理院発行)

■南海電鉄高野線路線図

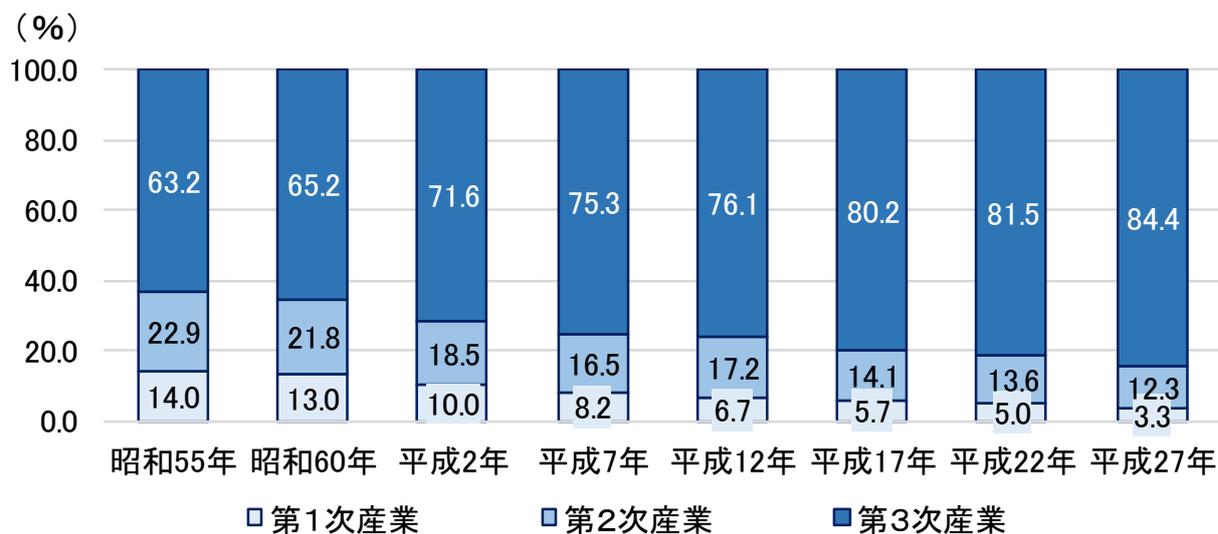
(4) 産業

①就業人口

本町の実業人口は平成27年(2015)時点で1,734人(総人口の約52%)であり、各産業別の就業率は、第1次産業3.3%、第2次産業12.3%、第3次産業84.4%で、高野山を中心とした観光関連のサービス業、小売業が町の経済の要としての役割を果たしている。また、第1次産業の中心的产品である高野榎や、第2次産業の中心的产品である胡麻豆腐や焼き餅などの食品製造、和漢胃腸薬や線香、位牌の製造など、産業の多くが高野山参詣客に大きく依存している。

このことから、本町の産業構造が、林業を中心とした第1次産業主体の構造から、「高野山」の参詣客・観光客をターゲットとした観光関連のサービス業、小売業などの第3次産業が経済の要としての役割を果たしており、その比重が年々高まっている現状といえる。

■高野町産業別就業人口割合

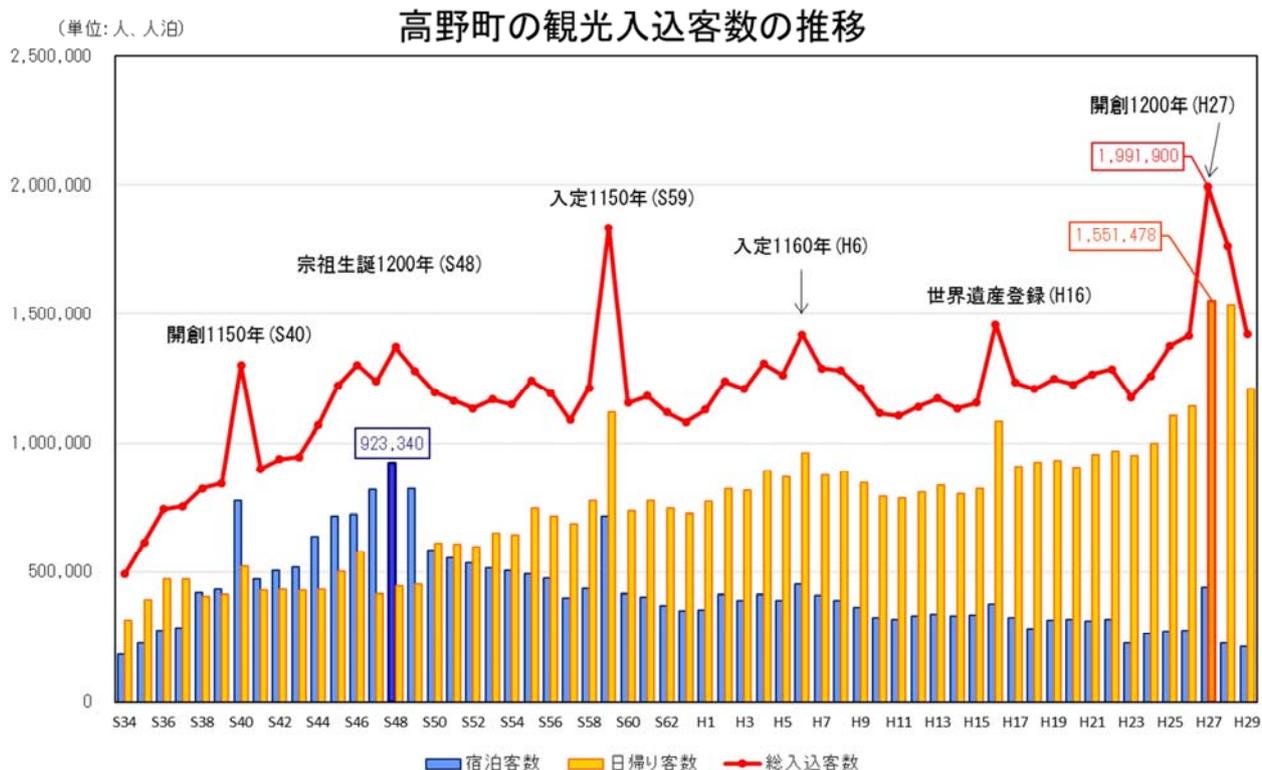


資料：国勢調査

②観光客動態

高野山への観光客数は、平成 25 年(2013)には 130 万人を超え、平成 29 年(2017)には約 142 万人と次第に増加している。その内訳を見ると、日帰り観光客数が伸びを見せているが、宿泊客数は微減傾向にある。

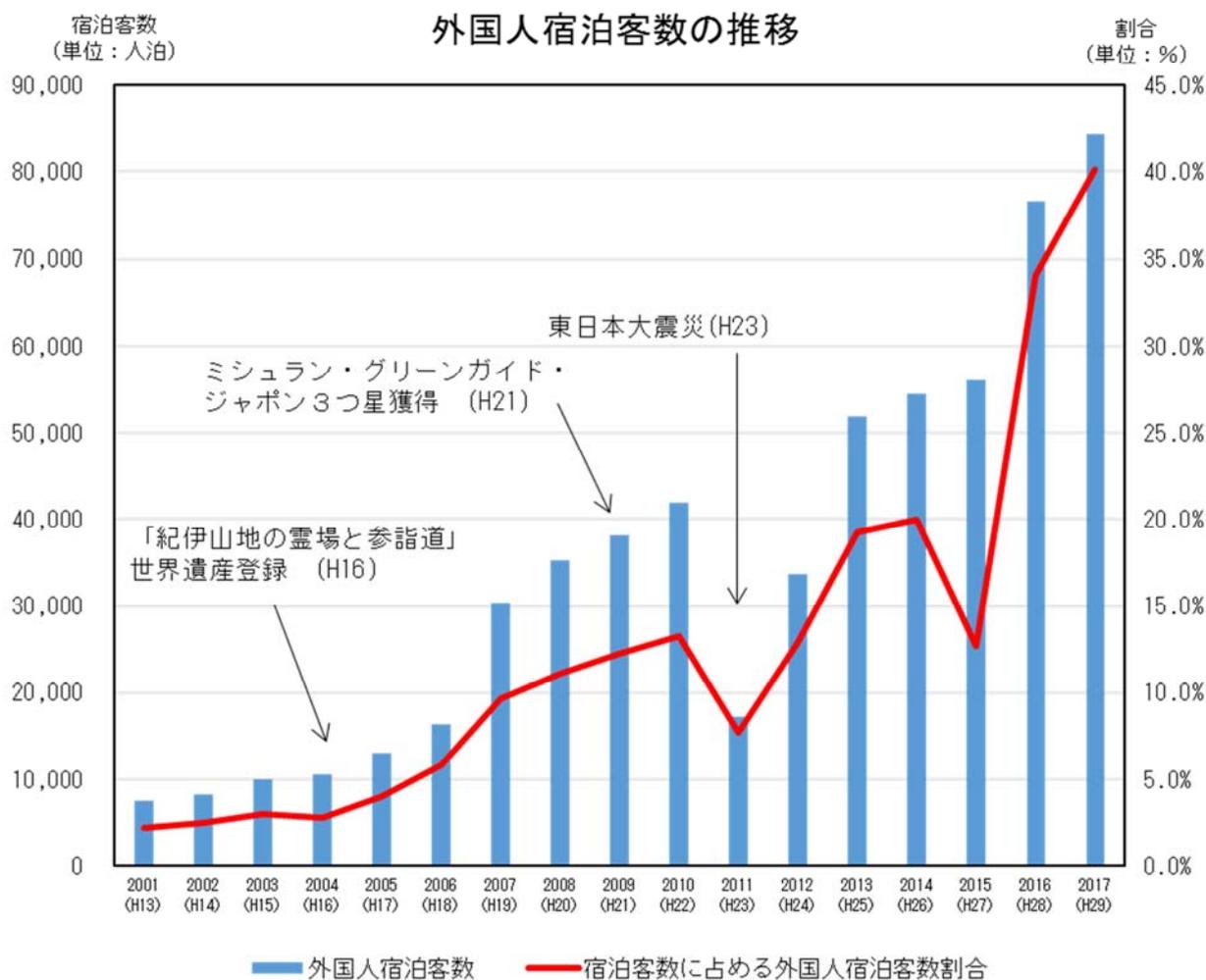
また、50 年ごとに開催される「高野山開創」及び「弘法大師入定^{こうぼうだいしにゆうじょう}」のそれぞれ二つの大法会の開催年には、入込客数が大きく増加する点に特徴があるといえる。



資料：和歌山県商工観光労働部「観光客動態調査報告書」

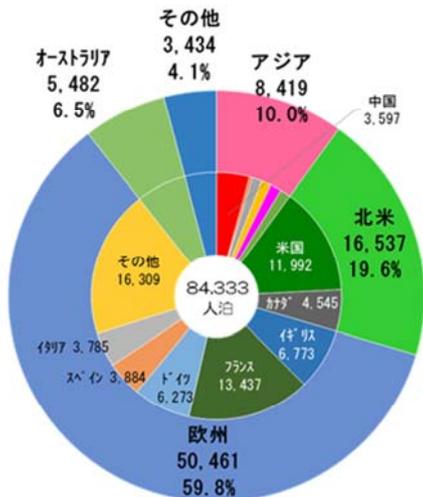
外国人の宿泊客数は、平成 23 年（2011）を除き、平成 13 年（2001）以来、増加傾向で推移している。

また、外国人宿泊客数を地域別で見ると、北米、欧州、オーストラリアからが全体の 9 割近くを占めている。これらの国、地域からの観光客の割合が高い要因として、高野山が平成 16 年（2004）、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録され、続いて平成 21 年（2009）にフランス・ミシュラン社が発行する外国人観光客向けガイドブック『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』において最高評価である「わざわざ旅行する価値がある」ことを意味する三つ星を獲得したこと等が挙げられる。

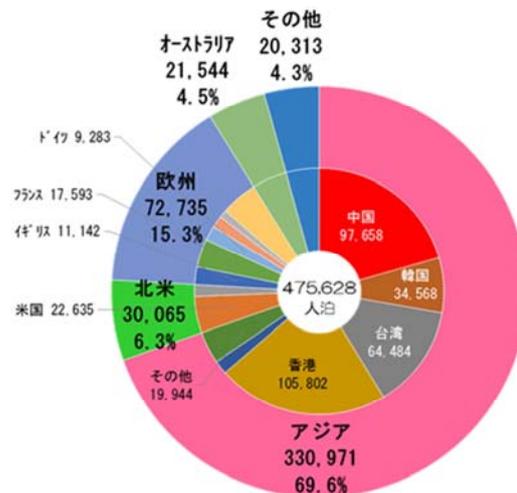


資料：和歌山県商工観光労働部「観光客動態調査報告書」

高野町の外国人宿泊客国別推計（平成29年）



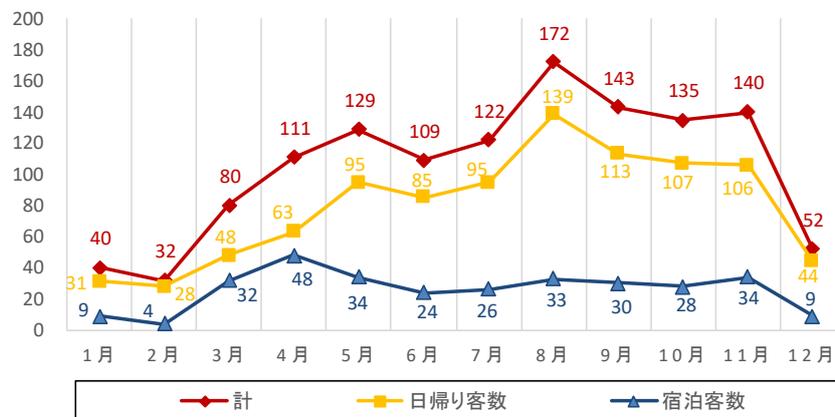
和歌山県の外国人宿泊客国別推計（平成29年）



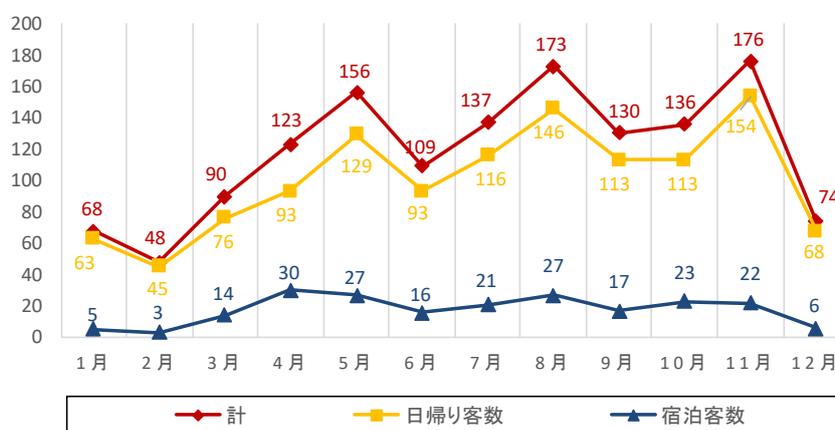
資料：和歌山県商工観光労働部「観光客動態調査報告書」

また、高野山への観光・参詣客数の月別推移を平成21年(2009)と平成29年(2017)と比較すると、平成21年(2009)では8月が最も多くなっていたが、平成29年(2017)では11月が最も多くなっており、気候のよい秋の時期の観光・参詣客が増えている。

(千人) 高野山への観光・参詣客数の月別推移（平成21年）



(千人) 高野山への観光・参詣客数の月別推移（平成29年）



資料：和歌山県商工観光労働部「観光客動態調査報告書」

3. 歴史的環境

(1) 歴史

～古代・中世～

本町域からは、現在までに奈良時代以前の遺跡は確認されていない。

空海が高野山を真言密教の修行道場を選んだ理由としては諸説ある。例えば、地主神である丹生都比売大神（丹生明神）から高野の地を譲られたとする説話や、唐から帰国するに際して中国大陸東部に位置する明州（現中華人民共和国浙江省）から日本に向かって投げた三鈷杵のとどまった地を探し求めているうちに、大小2匹の犬を連れた獵師に変化した高野御子大神（狩場明神）に出逢い、その案内で三鈷杵を発見したという説話などである。高野山麓に所在する丹生都比売神社（和歌山県伊都郡かつらぎ町）には現在も高野山と密接な関係がある神社として、丹生明神と狩場明神が祀られている。

ただ、これらは平安時代中頃に創られた話であり、聖地信仰や神仏習合思想を背景とした唱導説話・伝承の域を出るものではない。

史料的にみた場合、「高野」という地名が最初に登場するのは、弘仁7

年（816）6月に、空海が嵯峨天皇に献上した『性霊集』（成立年代不詳）である。

そこには、「空海、少年の日、好んで山水を渉覽せしに、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり、名づけて高野と曰ふ、計るに紀伊国伊都郡の南に当れり・・・（後略）」とある。

この記述は、平安京や遣唐使で中国に渡る以前、空海が山林修行に明け暮れていたことを示すものであると共に、その修行中に空海はすでに現在の高野山を発見していた可能性を示すものである。

高野山における伽藍の建設は、空海が半生をかけた大事業であった。工事は困難を極め、その完成は二代目の真然の頃、つまり空海が没してから50年を経過した頃であったと言われる。



飛行三鈷杵（金剛峯寺蔵、重要文化財）



『高野大師行状図画卷第四 三鈷宝剣事 一卷』（地藏院蔵、重要文化財）

高野山では空海（弘法大師）の死は入定にゅうじょうと呼ばれる。この信仰は、大師は現在も瞑想を続けているという入定信仰と呼ばれるものであり、10世紀ごろから生まれた。平安末期までにはこの信仰は庶民から貴族を問わず広く普及し、奥之院への納骨・納経・建碑の風習も定着してきた。

11世紀頃になると、藤原道長、頼道などの権力者による高野参詣が相次いだことなどにより、高野山の名は信仰の聖地として全国に知られるようになり、荘園の寄進も活発化した。寄進により多くの荘園（寺領）を得た高野山は安定した経済基盤を確保し、全国有数の寺社勢力となった。

鎌倉時代に入ると、高野山は幕府とも強いつながりができる。貞応2年（1223）頃、源頼朝の菩提を弔うため、北条政子により金剛三昧院が建立され、その後、実朝の菩提を弔うため出家した幕府の重臣安達景盛あだちかげもり（出家後は覚智かくち）がこの寺に住んだこともあり、高野山は幕府の庇護を受けることとなる。

鎌倉時代後期には、覚敷かくまうの発願により、慈尊院（九度山町）から大門・壇上伽藍を経て奥之院に至る当時の主要参詣道に、1町（約109m）ごとに町石（高さ約3mの石造五輪卒塔婆）が建てられ、弘安8年（1285）に落慶供養が行われた。この時建立された216基の町石はすべて寄進によるもので、後嵯峨上皇や北条時宗の名も見える。現在も鎌倉時代に建立された町石が174基残り、町石を含む道自体が「高野参詣道町石道」として国の史跡に指定され、世界遺産の構成資産となっている。

室町時代になると足利尊氏が金剛三昧院の僧、実融じつゆうに帰依したことを契機として室町幕府は高野山を保護するようになり、その後も各将軍の参詣が相次ぐ。中でも康応元年（1389）の三代将軍義満の高野参詣は、空前絶後の規模であったといわれる。

さらに、山上には高野聖の中で蓮華谷聖・萱堂聖・千手院聖という三大聖集団が形成された。

聖とは、勧進・唱導活動を行う者であり、その特徴は必ずしも一つの寺院に専属しないことにある。例えば中世期では、高野山のほかにも四天王寺（現大阪市）、東大寺（奈良県奈良市）、鞍馬寺（京都市）、善光寺（長野県長野市）等も聖の居住地であり、聖たちは行脚しつつ各地の寺院に居住し互いに交流していた。

勧進・唱導を中心的な活動とし、高野山と弘法大師信仰を全国に広めた高野聖の功績は大きく、室町時代以降将軍家のほか、守護や大名等の高野参詣が盛んになり、山上の塔頭寺院と檀縁関係だんえん（檀家として寺とのつながり）を結ぶものもあった。例を挙げれば、戦国時代の甲斐武田氏せいけいいんが成慶院と、阿波蜂須賀氏こうみょういんが光明院と檀縁関係を結んでいる。



甲斐武田氏家紋の菱紋（成慶院表玄関）



阿波蜂須賀家の
蜂須賀万字紋（光明院）



蜂須賀政勝位牌
（光明院蔵）

つまり高野聖は高野山と有力者を結ぶ仲介者でもあり、高野山への納骨や墓石建立を勧めた結果、現在の奥之院にみられる数多の墓石が建ち並ぶ独特の景観が形成された。

宣教師らが見た中世末頃の高野山の姿は多数の僧侶が学問を学ぶ、現在で言うところの大学都市的な様相を呈していたようであり、ルイス・フロイス（イエズス会の宣教師）の書簡には、「(紀伊国の) 共和国の一つは高野と称し、坊主約四、五千人が同所に居住している。同所には女子も家畜も一切入れず・・・(後略)」とあり、フランシスコ・ザビエルも、西洋的な見方として高野山を「中世日本の六大学」の一つであると記している。

天正 13 年 (1585) 豊臣秀吉は、根來寺 (和歌山県岩出市) を攻め、紀伊国雑賀地方で起こった一向一揆を屈伏させた後に高野山にも降伏を迫った。この時、交渉役として立ったのが、客僧として高野山にいた木食応其の名で知られる深覚坊応其であった。陣中に秀吉を訪れた応其は、高野山存続及び保護の必要性を説いた。秀吉は応其の話に感銘を受け、高野攻めを中止し、高野山は焼き討ちを免れた。

さらに秀吉は、武装解除後の高野山に対して伽藍の再興や奥之院の修復、母の供養のための青巖寺の建立など種々の保護施策をとった。なかでも高野山にとって最大の恩恵は、経済的基盤である寺領の復活であった。天正 19 年 (1591) には伊都 (和歌山県伊都郡)・那賀 (和歌山県紀の川市、岩出市) で 1 万 1,000 石、翌年さらに那賀で 1 万石が与えられた。これらは全て応其を通じて行われたものである。

中世末の高野山は権力者の庇護、高野聖の活躍等により復興・活況の時代を迎えつつあった。

～近世～

江戸時代に入ってから、江戸幕府は、秀吉が復活させた寺領 2 万 1,000 石を安堵した。

高野山では、真言密教の研究を中心的な役割とする集団である「学侶方」と、寺院の管理・法会といった実務を担った集団である「行人方」があり、学侶領 9,500 石、行人領 1 万 1,500 石にそれぞれ配分して治めた。その後、慶安 2 年 (1649)、幕府は伊都郡内で 300 石 (行人領 100 石、聖領 200 石) を加増した。以降、高野山は伊都・那賀両郡で 2 万 1,300 石、169 の村々を支配することになり、この体制は明治維新まで続いた。

江戸幕府は高野山という宗教勢力が強大になるのを恐れ、種々の統制策をとっているが、学侶方、行人方、聖の高野三派の分断政策もその一つであった。15 世紀中頃から、学侶方と行人方との対立は頻繁に生じていたが、対立が激化したのは近世になってからである。元禄 5 年 (1692) には、幕府は学侶方と行人方の抗争に乗じて、1,182 坊あった行人等の坊のうち 902 坊を取りつぶし、行人ら 627 人を遠島、335 人を山外追放した。この裁定を元禄聖断といい、以後、行人の勢力は衰退した。

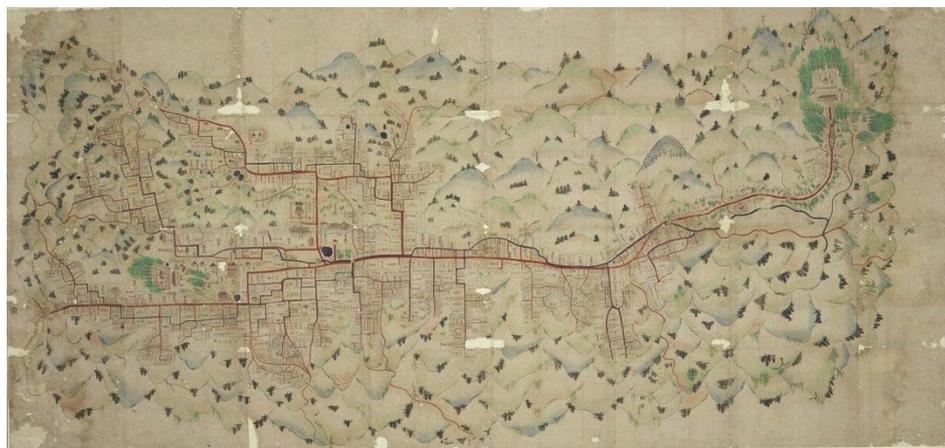
徳川家が蓮花院(大徳院)を菩提寺にしたのに倣^{なら}って、諸大名も高野山の各寺院を菩提所と定めて祖先の墓石を建立したため、奥之院には当時建立された全国の近世大名の墓所・墓石が林立する。

江戸時代の高野山は、「弘法大師信仰に基づく宗教上の聖地」としての性格、「豊臣政権下で返還された2万1,300石の寺領を有する宗教領主」としての性格、そしてみやげもの店などが次第に形成され、「聖俗混交の宗教都市」的な性格があった。

なかでも宗教上の聖地としての高野山は全国的な知名度をもち、多くの参詣者を集め、みやげもの店等は繁盛した。



徳川家の葵紋（蓮花院正門）



『高野山全山図 (御公儀上一山図)』正保3年(1646)、金剛峯寺蔵

江戸時代の高野山上は女人禁制であり、俗空間である町家が集まる区域ですら男性しかいなかったが、高野山を訪れる女性は数多く、女人道といわれる山上の周回路を^{ろくろとうげ}通って、^{ようはい}轆轤峠などの伽藍が一望できる場所から遙拝していた。

～近現代～

明治2年(1869)8月、高野町域の村々は堺県(現在の大阪府南部、奈良県)の管轄となった。堺県の知事には小川一敏が就任し、同年11月に初めて高野山を訪れた。小川知事は、高野山に対して学侶方・行人方・聖の三派を廃止して金剛峯寺と改めること、僧侶の役職について定めた規定を守ること、神仏習合の廃止、根本大塔再建などを指示した。

明治3年(1870)4月、高野町域の村々は五條県(現在の奈良県南部、大阪府東部)の管轄となり、明治4年(1871)11月からは和歌山県の管轄となった。同じく明治4年(1871)1月の太政官布告により、金剛峯寺は、境内地を除く全ての寺領を新政府に奉還した。寺領からの年貢収入を失った高野山は窮乏の時代を迎えた。

明治5年(1872)、太政官布告によって女人禁制を解くことが命ぜられた。それまでは女性の入山は許されず、七口にあった女人堂に宿泊し、山上の周囲につけられた女人道から山内を拝んだ。そのうち不動坂口の女人堂だけが現存し、女人道も部

分的に跡をとどめている。高野山では太政官布告後も高野山における生活規則である「山規」を盾に女性と7歳以下の子どもの在住を認めず、宿泊にも種々の制限を設けて厳しく規制した。例えば、明治20年(1887)頃からは隠れて居住する女性を請願巡査が取り締まる日が月に1~2度あった。請願巡査とは、請願者が個人的に費用を納めて配置される警察官のことで、明治14年(1881)年に制度化され昭和13年(1938)に廃止された。当時の高野山では総本山金剛峯寺が請願者であった。

明治37年(1904)に日露戦争が始まると、出征兵士である青年男子の家を守るという理由のもとに公然と高野山上に居住する女性が急増した。高野山上における労働力の激減という現実的問題も相まって、明治38年(1905)、ついに高野山側も女性の居住を認めるようになった。

寺領返還に続く、明治6年(1873)の^{あげちれい}上地令は、高野山を更なる経済的困窮に追い込み、廃寺や離山僧が続出した。維新当時の680か寺は、明治17年(1884)には431か寺に減少している。さらに明治21年(1888)の大火のあとで、130の寺名を残し、建物も60余に統廃合した。残った寺院の多くは宿坊経営に自立の道を求めていった。現在の宿坊は52か寺ある。なお、それ以外の寺院についても近世以来の檀那関係は維持されている。

町家は、寺の長屋を出て廃寺の跡に自分の家屋を建てる者が多くなり、また、山麓の村人が新しく店を開く者も出てきた。明治21年(1888)の大火の後、寺院の間に町家が並ぶ寺内町の原型ができていった。

その後、昭和9年(1934)の弘法大師入定千百年御遠忌大法会の時、大規模な区画整理が行われ、現在のまちなみの基盤が形成された。昭和19~20年(1944~1945)には高野山分遣隊(後に高野山海軍航空隊)予科練習生が常駐し、山上は一時軍国色に塗り潰された。

高野山上では弘法大師の年忌法要が、まちなみを変化する大きなきっかけとなった。例えば、明治17年(1884)の弘法大師入定千五十年御遠忌大法会では、高野山への参詣客が大幅に増えて、町家の商売が繁盛した。大正4年(1915)の高野山開創千百年記念大法会では、高野山上の道路が寺院や町家を移動させて整備された。金剛峯寺前の塗橋や御廟橋などの架け替えも行われ、山上の様子は一変した。高野登山鉄道が大阪の道頓堀駅(現汐見橋駅)から橋本駅まで開通したことで、大阪方面からの参詣客が椎出(和歌山県伊都郡九度山町)から高野山女人堂に至る道を利用できるようになった。大正4年(1915)の大法会の頃には、高野山上へ通じる主要な道路沿いに宿場町が形成され、上り坂で参詣客の背中を後ろから両手で押し上げて歩行を補助する腰押し、荷物持ち、二人乗りの馬などが高野山への道を通った。この頃には約200名の駕籠かき(駕籠を担いで人を運ぶ職業)がいたと言われている。しかし、昭和5年(1930)4月にケーブルカーが開通したことにより、これらの商売は廃れていった。極楽橋から高野山に登るケーブルカーの開通によって、ケーブルカーを利用する参詣客、観光客が増加した。注目点として、ケーブルカー開

通以前の大正4年(1915)に高野山開創千百年記念大法会記念事業として、新しい京大坂道不動坂が、平安時代から利用されていた不動坂の下に開設・整備されてからは、一般的に「不動坂」として認知、利用されるようになった。平安時代の不動坂は次第に利用されなくなり、「腰押し」等の特色ある職業とともに人々の心から忘れ去られていった。

昭和9年(1934)の弘法大師入定千百年御遠忌大法会の際には、人力車が大活躍し、昭和9年(1934)7月、玉川有料林道(現国道371号)の完成によって、橋本市から自動車が高野山へ入るようになった。

昭和40年(1965)の高野山開創千五十年記念大法会に向けた高野山有料道路が完成、昭和59年(1984)の弘法大師入定千五十年御遠忌大法会に向けた高野龍神スカイラインの完成がみられた。

参詣客を迎える高野山町家の形成、弘法大師の年忌法要にともなう交通路の変貌と発達以外にも、林業や凍り豆腐(高野豆腐)などの産業も発達した。

高野山の周囲に所在する町域の山村の中には、高野山への参詣道である「高野七口」の重要な中継点として登山者の信仰を支えたところがある

一方、山の特徴を生かして、山仕事や山の産物を生産し、高野山又は平野部へ出荷していた。コウゾ栽培(細川・花坂・湯川地区)、箸削り(相ノ浦・大滝・富貴地区)、伐採から漆塗り工程までの位牌作り(杖ヶ藪地区)、原皮師(檜の表皮を採取し、屋根葺き用に加工する職人)による檜皮採取(檜原・東又・杖ヶ藪地区等)、生薬トウキの生産(富貴・筒香地区)などが盛んであった。

平成16年(2004)には高野山を含めた「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録され、平成21年(2009)に『ミシュラン・グリーン・ガイド・ジャポン』で三つ星の評価を受けた。続いて、平成26年(2014)には高野山が、『NATIONAL GEOGRAPHIC TRAVELER』(米・ナショナルジオグラフィック協会刊行の世界的な旅行雑誌)選定の「2015年に訪れるべき場所 世界のベスト20」に日本で唯一選出された。

平成28年(2016)には世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の軽微な変更による追加登録が決定された。高野参詣道で追加された4地点は、三谷坂((丹生酒殿神社含む)和歌山県伊都郡かつらぎ町)、京大坂道不動坂・女人道(和歌山県伊都郡高野町)、黒河道(和歌山県橋本市、高野町、九度山町)である。



高野山の活況(昭和9年)

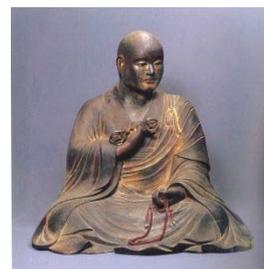


凍り豆腐づくり(高野山地区)(個人蔵)

(2) 関わりのある人物

【空海】(774～835)

平安時代前期の僧侶。宝亀 5 年 (774) 讃岐国多度郡に生まれる。延暦 23 年 (804) 入唐し、青龍寺の恵果(えか/けいか)に学ぶ。多くの経典を持って大同元年 (806) 帰国。弘仁 7 年 (816) 高野山を開く。承和 2 年 (835) 3 月 21 日高野山に没する。延喜 21 年 (921) に醍醐天皇から「弘法大師」の諡号を贈られる。著書に『三教指帰』、『即身成仏義』、『文教秘府論』、『十住心論』がある。



空海像 (金剛峯寺蔵)

【嵯峨天皇】(786～842)

第 52 代天皇 (在位 809～823)。桓武天皇の皇子。漢詩文をこよなく愛し、唐文化に傾倒。政治的には蔵人所・檢非違使などを設けて律令制を固めた。空海に弘仁元年 (810) 東大寺の別当を任じ、さらに弘仁 2 年 (811) 乙訓寺の別当を任じた。

弘仁 7 年 (816) 空海の希望により高野山を下賜。弘仁 14 年 (823) には東寺 (教王護国寺) を下賜。空海にとって最良で最大の理解者であり、空海、橘逸勢とともに能筆で知られる三筆の一人。



嵯峨天皇像御影 (摸本)
(東京国立博物館蔵)

【真然】(804～891)

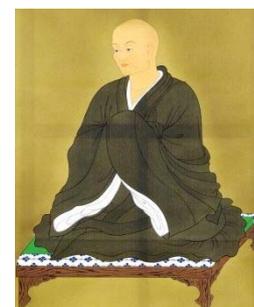
空海の甥にあたる真然は空海を慕って幼い頃に出家したといわれる。空海より高野山を託され第 2 世となった。伝法会の基礎を確立し、後進の育成に力を注ぐとともに、空海の伽藍建立計画である『御図記』をもとにした堂塔の造営を進める。貞観 18 年 (876) 根本大塔に続き、仁和 3 年 (887) には西塔を完成させ、空海の思い描く壇上伽藍を実現した。高野山の礎を築いた名僧として信仰されている。



真然像
(公益財団法人高野山文化財保存会蔵)

【覚鑿】(1095～1143)

平安時代後期の僧侶。肥前国藤津荘の人。新義真言の開祖。永久 2 年 (1114) 高野山に入り最禅院の明寂・阿波上人青蓮に師事した。長承元年 (1132) 大伝法院・密厳院が鳥羽上皇の御願寺となる。同年 12 月大伝法院座主・金剛峯寺座主に就任。保延 6 年 (1140) 金剛峯寺方の衆徒と対立し、根来に下山。康治 2 年 (1143) 根来で没。元禄 3 年 (1690) 興教大師の諡号を送られる。著作に『五輪九字明秘釈』、『阿弥陀秘釈』、『一期大要秘密集』がある。



覚鑿像
(公益財団法人高野山文化財保存会蔵)

【覚敷】^{かくきょう}（生没年未詳）

鎌倉時代の僧侶。文永2年（1265）3月、高野山麓の慈尊院から奥之院を結ぶ道に210余基の町石卒塔婆の建立を発願。有力者等の寄進を得て、弘安8年（1285）、210余基の町石卒塔婆建立を完成させる。

鎌倉時代の町石
（十町石）【応其】^{おうご}（1536～1608）

安土桃山時代、江戸時代初期の僧侶。木食^{もくじきしょうにん}上人・興山^{こうざんしょうにん}上人と呼ばれた。近江に生まれる。もとは武士と言われる。37歳のとき高野山に入山し、十穀を断つ木食の修行を行う。高野山では客僧の身分であるが、秀吉の紀州攻めの際、高野山の意見をまとめ、秀吉と交渉、高野山を救う。天正17年（1589）に17か条の掟書を出し、法会・年中行事・灌頂^{かんじょう}・学道・院家相続・集会などに関する高野山の寺院制度を改革。さらに高野山諸伽藍再興の監督を命ぜられ、高野山の堂塔^{おおまんどころ}など25か所を建立・修築。文禄2年（1593）高野山に秀吉母大政所の菩提を弔うため、青巖寺を開き同寺に住す。慶長5年（1600）関ヶ原の合戦ののち近江飯導寺^{ほんどうじ}に隠居。慶長13年（1608）没。連歌にすぐれ、著書に『無言抄』^{むごんしょう}がある。

木食応其上人像
（金剛峯寺蔵）

【豊臣秀吉】（1537～1598）

安土桃山時代の武将、関白太政大臣。尾張国で百姓の子として生まれ、のち織田信長に仕える。天正10年（1582）の本能寺の変で信長を倒した明智光秀を討つと、同年の清洲会議で自らを信長の後継者として位置づける。天正13年（1585）、紀州攻めを行い、根來寺・粉河寺^{こながわでら}を焼き打ち、高野山に対しても降伏を求め帰順させる。和歌山城を築城し、紀州を弟秀長の支配地とする。その後各地を平定し、天正18年（1590）に全国統一を成し遂げる。文禄・慶長の役と呼ばれる朝鮮出兵を行い、海外征服を図ろうとするが、朝鮮民衆の抵抗などにあい、果たせずに終わる。このとき紀州からも水軍として多くの民衆が駆り出されている。慶長3年（1598）没。



豊臣秀吉像（蓮華定院蔵）

4. 文化財等の分布状況

高野町には、平成30年（2018）11月1日現在271件（国指定208件、県指定42件、町指定2件、国登録19件）の文化財が指定・登録されている。

これらの文化財のほとんどが、金剛峯寺境内である高野山上に集中している。これは、空海が真言密教の根本道場として金剛峯寺を高野山上に開創して以来、連綿と受け継がれてきた信仰に基づき、金剛峯寺としての伽藍の整備や山林の管理、供養塔の建立等が続けられてきたためである。現在、八葉の峰々に囲まれた山上盆地に総本山の金剛峯寺を中心に117の塔頭寺院が密集し宗教都市を形成している。なかでも、一山の総門である金剛峯寺大門の建つ「大門地区」、空海が高野山開創にあたり最初に開かれ根本大塔や金堂等の諸堂が並び立つ壇上伽藍と呼ばれる「伽藍地区」、高野山真言宗の本山である金剛峯寺本坊等が所在する「本山地区」、空海の入定所である御廟と20万基に及ぶとされる石塔が並び立つ「奥院地区」、徳川家康、秀忠の霊屋の建つ「徳川家霊台地区」、源頼朝の菩提を弔うため建立され、国宝を含む重要文化財建造物が残る「金剛三昧院地区」など、高野山上でも特に重要な地域は、「金剛峯寺境内」として国の史跡に指定され、そこには重要文化財の建造物をはじめとした多くの歴史的建造物が所在する。

また、高野山上には、仏像や仏画など信仰に関連する美術工芸品も多く受け継がれており、191件の国の重要文化財（内国宝21件）、28件の和歌山県指定有形文化財がある。これらの大半は、現在、高野山霊宝館において保存、展示されている。

種別		国		県指定	町指定	計	
		指定	登録				
有形文化財	建造物	13	13	5	0	31	
	美術工芸品	絵画	57	0	12	0	69
		彫刻	55	0	2	0	57
		工芸品	32	0	10	0	42
		書跡・典籍	38	0	3	0	41
		古文書	5	0	0	0	5
		考古資料	2	0	1	0	3
歴史資料	2	0	0	0	2		
記念物	遺跡	3	0	5	2	10	
	名勝地	1	6	1	0	8	
	動物、植物、地質鉱物	0	0	3	0	3	
計		208	19	42	2	271	

高野町所在指定・登録文化財件数一覧表

(1) 国指定の文化財

【こんごうぶじふどうどう金剛峯寺不動堂】(国宝 建造物)

現在は壇上伽藍の東端に位置するが、本来はいっしんいん一心院にあった建物で、明治41年(1908)に現在地に解体移築された。創建は建久8年(1197)に行勝上人ぎょうしょうによって行なわれたとされる。平面や軒の納まりが複雑で特異な形態の建物である。



金剛峯寺不動堂

【こんごうさんまいいんたほうとう金剛三昧院多宝塔】(国宝 建造物)

貞応2年(1223)に源頼朝、実朝の菩提のため、北条政子が建立した檜皮葺ほうさんげんの方三間多宝塔。二重に対して一重が大きく均整のとれた姿であり、一重内部は全面彩色が施された華やかな空間となっている。鎌倉初期の建立とされる。



金剛三昧院多宝塔

【こんごうぶじおくいんきょうぞう金剛峯寺奥院経蔵】(重要文化財 建造物)

弘法大師御廟の東に隣接して位置する方三間宝形造ほうぎょうづくりの経蔵。経蔵正面に懸かる扁額銘により慶長4年(1599)に石田三成によって建立されたことがわかる。内部には、八角形の回転式輪蔵を備え、全面にわたって彩色が施される。



金剛峯寺奥院経蔵

【こんごうぶじとくがわけいだい金剛峯寺徳川家霊台】(重要文化財 建造物)

徳川家と関係の深い聖方ひじりがたの大徳院の境内にあったもので江戸時代には御霊屋おたまやと呼ばれていた。家康霊屋と秀忠霊屋の2棟の同型の建物が並び建つ。外部は彫刻をふんだんに詰め込みこ装飾そうしよく華美かびであり、内部は絢爛豪華な須弥壇けんらんごうかと厨子しゆみだんを設け、づし蒔絵まきえなどが施される。



金剛峯寺徳川家霊台

【こんごうぶじさんのういんほんでん金剛峯寺山王院本殿】(重要文化財 建造物)

壇上伽藍の西端に位置する。高野山総鎮守の社殿で、空海が弘仁10年(819)に高野山開創にあたり伽藍の諸堂に先立って建てられた。現在の建物は天保2年(1831)に再建されたものであり、丹生明神社、高野明神社、総社の3棟がある。



金剛峯寺山王院本殿

【こんごうぶ じだいもん金剛峯寺大門】（重要文化財 建造物）

高野山の総門であり、高野山上の西端に位置する。最初は鳥居形式で、現在地より数町下方にあったと伝えられる。保延6年（1140）に楼門形式に改められ、その後数度の焼失と再建を繰り返してきた。現在の五間三戸二階二重門の建物は、宝永2年（1705）に再建されたものである。



金剛峯寺大門

【こんごうさんまいいんきょうぞう金剛三昧院経蔵】（重要文化財 建造物）

桁行三間、梁間二間、寄棟造檜皮葺校倉造の経蔵。弘安年間（1278-1288）の「覚智大蓮房建立棟宇目録」の記録から金剛三昧院多宝塔と同時期の建立と思われる。類例の少ない鎌倉時代の校倉として貴重である。



金剛三昧院経蔵

【こんごうさんまいいんきやくでんおよび だいどころ金剛三昧院客殿及び台所】（重要文化財 建造物）

向かって左手が入母屋造檜皮葺の平入りの客殿、右手が入母屋造檜皮葺の妻入りの台所が建ち、それらに屋根を架けてつなげ、正面に入母屋造檜皮葺の妻入りの玄関がつく。建物規模は、桁行 34.3m、梁間 18.9m で建築様式から江戸時代初期の建立と思われる。



金剛三昧院客殿及び台所

【こんごうさんまいいん ししよみょうじんしゃほんでん金剛三昧院四所明神社本殿】（重要文化財 建造物）

金剛三昧院の鎮守社である一間社春日造檜皮葺の小規模社殿。創建年代は不明であるが、現在の建物は墨書により、天文21年（1552）の建立であることがわかる。



金剛三昧院四所明神社本殿

【ふげんいん しきやくもん普賢院四脚門】（重要文化財 建造物）

塔頭寺院の一つである普賢院の南面に位置する門。寛永年間（1624～1643）に造営された東照宮の四脚門を明治25年（1892）に現地に移築したものである。檜皮葺の四脚平唐門であり、軸部は丹塗で木鼻等の彫刻に極彩色を施す。



普賢院四脚門

【まつだいらひでやすおよび どうははたま や松平秀康及び同母霊屋】（重要文化財 建造物）

奥之院の御廟橋の手前に位置する。福井藩初代藩主の松平秀康の霊屋と秀康の母の霊屋の2棟の石造霊屋が並び建つ。母の霊屋は、慶長9年（1604）に秀康により建立。秀康の霊屋は、慶長12年（1607）に2代藩主忠直により建立された。



松平秀康及び同母霊屋

【^{うえすぎけんしんたまや}上杉謙信靈屋】（重要文化財 建造物）

奥之院の中の橋手前に位置する。本靈屋は、中に収められる位牌の刻銘より上杉謙信を祀っていることがわかり、建築様式から建立年代は江戸時代初期と推定されている。桁行三間、梁間二間、入母屋造檜皮葺。小規模な靈屋であるが繊細な彩色、彫刻共に細部までが施されている。



上杉謙信靈屋

【^{さたけよししげたまや}佐竹義重靈屋】（重要文化財 建造物）

奥之院の一の橋付近に位置する。切石積基壇の上に置かれた方一間切妻造であり、49本の卒塔婆形の角材を建て並べ壁とする特異な形態の靈屋。内部には5基の宝篋印塔を納めている。



佐竹義重靈屋

【^{けんぼんちやくしよくぶつねはんず}絹本著色仏涅槃図】（国宝 絵画）

縦 267.8 cm、横 271.2 cmの仏涅槃図。応徳3年（1086）の墨書銘がある現存最古の仏涅槃図であり、横たわる釈迦を取り巻いて悲しんでいる菩薩、仏弟子、信者達を様々な姿態であらわす。



絹本著色仏涅槃図

【^{けんぼんちやくしよくりょうがいまんだらず}絹本著色両界曼荼羅図】（重要文化財 絵画）

本図は、久安6年（1150）に再建された壇上伽藍の金堂の東西壁に懸けるために描かれた縦 427.2 cm、横 394.0 cmの2幅の両界曼荼羅である。平清盛が頭血をしぼって描かせたと伝えられることから、「血曼荼羅」とも呼ばれる。



絹本著色両界曼荼羅図

【^{もくぞうはちだいでうじりゅうぞう}木造八大童子立像】（国宝 彫刻）

壇上伽藍の金剛峯寺不動堂の本尊の不動明王の脇侍として祀られていた鎌倉時代の作とされる童子像。運慶を大仏師とする慶派仏師の作と考えられ、特に矜羯羅童子・制多伽童子の2体は運慶の作風が最もよくあらわれているとされている。



木造八大童子立像

^{もくぞう ふ どうみょうおう さぞう}
【木造不動明王坐像】 (重要文化財 彫刻)

金剛峯寺不動堂の本尊であり一心院を建立した行勝上人の作とされる像高 87.0 cm の不動明王坐像。本尊を中心として運慶作とされる国宝の八大童子立像が安置されていた。体軀はほっそりとし、衣文の彫りも浅く、平安時代後期の作風を示す。



木造不動明王坐像

^{さわちどりらでんまきえこからひつ}
【澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃】 (国宝 工芸品)

長方形角丸の箱の前後側面に四脚を取り付けた縦 30.5 cm、横 39.9 cm、高さ 30.0 cm の木製黒漆塗小唐櫃。かきつばたの咲く水辺に千鳥が群れ飛ぶ自然の風景を黒漆地に金蒔絵で絵画的に表現している。仏具類を納めていたと伝えられるが、荘厳な意匠から経巻を納めていたものと考えられている。



澤千鳥螺鈿蒔絵小唐櫃

^{ろうこしいき}
【聾瞽指帰】 (国宝 書跡)

聾瞽指帰は、空海が 24 歳の時の自筆であり、儒教・道教・仏教を比較して優劣をつけ、空海が仏教を選んだ根拠を示した「三教指帰」の草稿本とされる。四六併儷体で書かれた文章は日本漢文学史上最も優れたものとされている。



聾瞽指帰

^{こんごうぶじこんほんえんぎ}
【金剛峯寺根本縁起】 (重要文化財 書跡)

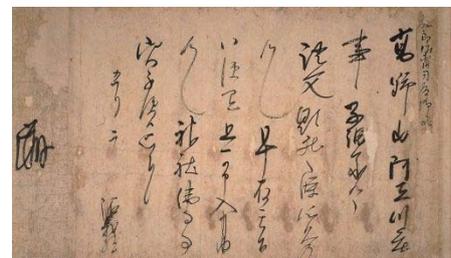
空海が天野の丹生都比売神社から広大な寺領を譲られ、高野山を開創するに至ったことを記したもの。高野山に古くから伝わる「弘法大師御手印縁起」を写したもので、後醍醐天皇自らの奥書と御手印を加え、寺からの持ち出しを固く禁じた。



金剛峯寺根本縁起

^{ほうかんしゅう しよくほうかんしゅう ゆうしよくほうかんしゅう}
【宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集】 (国宝 古文書)

高野山の諸寺院に伝わる古文書を集め、まとめて編集したもの。保安元年 (1120) から寛保 3 年 (1743) の間の古文書、古記録など 3,689 点を江戸時代に種類別に三部に集大成したものであり、高野山の歴史を知る上での根本史料である。



宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集

こう や きんおく の いんしゅつ ど ひん
【高野山奥之院出土品】（重要文化財 考古資料）

昭和 37 年から 38 年（1962～1963）に、高野山奥之院より出土した一括遺物。天永 4 年（1113）在銘の経筒きやうづつの他、優れた中国製陶磁器類、古瀬戸などを利用した納骨関係品も多く出土している。



高野山奥之院出土品

こんごうぶ じけいだい
【金剛峯寺境内】（史跡）

高野山開創以来、外八葉の峰々に囲まれた全山が金剛峯寺と呼ばれていた。一山の総門である金剛峯寺大門の建つ「大門地区」、空海が高野山開創にあたり最初に開かれ根本大塔や金堂等の諸堂が並び立つ壇上伽藍と呼ばれる「伽藍地区」、高野山真言宗の本山である金剛峯寺本坊等が所在する「本山地区」、空海の入定所である御廟と 20 万基に及ぶとされる石塔が並び立つ「奥院地区」、徳川家康、秀忠の霊屋の建つ「徳川家霊台地区」、源頼朝の菩提を弔うため建立され、国宝を含む重要文化財建造物が残る「金剛三昧院地区」の 6 つの地区が特に重要な遺構等が残る範囲として史跡に指定されている。



金剛峯寺境内(奥院地区)

こう や きんけいみち
【高野参詣道】（史跡）

古代から近世・近代に至るまで、空海や高野山への信仰のため、人々が参詣に用いた道。高野町に残る参詣道のうち、町石道、黒河道、京大坂道不動坂、女人道が史跡に指定されている。



高野参詣道 町石道

くま の きんけいみち
【熊野参詣道】（史跡）

古代から、近世・近代に至るまで熊野信仰に基づいて参詣に用いた道であり、高野町には高野山と本宮を結ぶ小辺路が残されている。



熊野参詣道 小辺路

てんとくいでん
【天徳院庭園】（名勝）

小堀遠州こぼりえんしゅうの作庭と伝えられている池泉観賞式ちせんかんしょうしきの庭園であり、元和元年（1615）に天徳院が建立された際に、建物と共に造られたと考えられている。山裾を利用して築山とし、その下の池に中島と小島を置き、築山裾つきやますそに立石で滝石組を作る。



天徳院庭園

(2) 国登録の文化財

【高野山靈宝館】（登録有形文化財 建造物）

高野山上の各塔頭寺院所蔵の宝物を収集保存する施設として大正9年（1920）に建てられた。木造であるが防火・防湿のため、内外全てを漆喰塗りとしている。紫雲殿、玄関・北廊・中廊、放光閣、南廊及び西廊、宝蔵の5棟が登録されている。



高野山靈宝館

【高野山大学図書館】（登録有形文化財 建造物）

昭和4年（1929）に建てられた鉄筋コンクリート造地下室付三階建の図書館。武田五一の設計によるもので、建築当時は、東洋一の図書館とも称された。



高野山大学図書館

【橋本警察署高野幹部交番】（登録有形文化財 建造物）

大正10年（1921）に橋本警察署高野分署として竣工し、その後、高野警察署を経て現在の幹部交番となった。高野山の歴史的景観に配慮した社寺風の外観ではあるが、窓等に洋風の意匠も取り入れている。



橋本警察署高野幹部交番

【珠数屋四郎兵衛店舗】（登録有形文化財 建造物）

昭和8年（1933）に建てられた木造2階建の入母屋造銅板葺の平入りの大型の店舗。外壁は、大壁造りで縦長のガラス窓を並べた近代的な意匠も取り入れている。



珠数屋四郎兵衛店舗

【南海電気鉄道鋼索線高野山駅駅舎】（登録有形文化財 建造物）

高野山ケーブル開通の昭和5年（1930）に先立つ、昭和3年（1928）建築の駅舎。高野山の景観に配慮し、寺院の意匠を採用した特徴的な建物。「近畿の駅百選」にも選ばれた駅舎である。



南海電気鉄道鋼索線
高野山駅駅舎

【^{わごうあん}和合庵】（登録有形文化財 建造物）

大正 15 年（1926）に建てられた住宅。主屋、土蔵、門、塀の 4 棟が登録されている。敷地中央に主屋、北端に土蔵を建て、敷地の南に庭を作り塀で囲み、主屋南東部に門を設ける。和風と洋風を混合させた独特な作りの建物である。



和合庵主屋

【^{こうだいいんしよいんていえん}光臺院書院庭園】（登録記念物 名勝地関係）

光臺院の書院に面して造られた池泉式庭園。大正～昭和期を代表する庭園研究家であり作庭家である重森三玲^{しげもりみれい}によって昭和 38 年（1963）に作庭された。池に中島を作り、背後に高野山を囲む八葉を表現した築山群^{しげもりみれい}を設け、軒下には^{すはま}州浜を配し奥行き深い重森独特の庭に仕上げられている。



光臺院書院庭園

（3）県指定の文化財

【^{こんごうさき}金剛峯寺】（県指定有形文化財 建造物）

金剛峯寺は、明治 2 年（1869）に青巖寺と興山寺を合併して総本山金剛峯寺としたもので、境内の東半部には旧青巖寺の建物が残る。旧青巖寺を構成する建物は主殿、経蔵、鐘楼、真然堂、護摩堂、山門、会下門、かご塀の 9 棟があり、これらが「金剛峯寺」として和歌山県指定有形文化財となっている。



金剛峯寺

【^{もくぞうこんごうりきしりゅうぞう}木造金剛力士立像】（県指定有形文化財 彫刻）

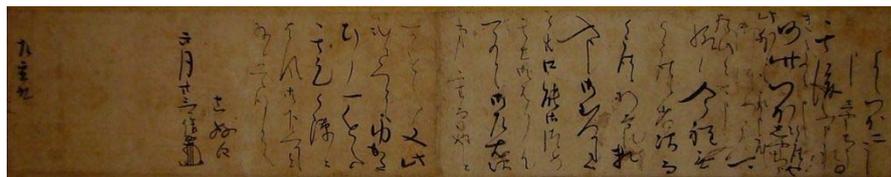
金剛峯寺大門に置かれる仁王像。像高は、阿形像^{あぎょう}が 546 cm、吽形像^{うんぎょう}が 558 cm。元禄 16 年（1703）に造立されたもので、東大寺南大門の金剛力士像に次ぐ規模の巨像である。



木造金剛力士立像

【^{さなだゆきむらじひつしよじょう}真田幸村自筆書状】（県指定有形文化財 書跡）

真田信繁^{のぶしげ}（幸村）が麓の九度山に閑居していたときの書状。信繁が、兄の信之^{のぶゆき}の家臣に焼酎を求めた「焼酎の文」には、焼酎を入れた壺の口をよく締めて目張りしてほしいことなどが記される。



真田幸村自筆書状

【^{こんごう ぶ じけいだいしゅつど}金剛峯寺境内出土の^{じちん ちんだんぐ}地鎮・鎮壇具】（県指定有形文化財 考古資料）

金剛峯寺境内にある大門や徳川家霊台、金剛三昧院、宝性院跡などから出土した室町時代から江戸時代にかけての地鎮具・鎮壇具。地鎮供養のため建物中央に埋納された賢瓶などの地鎮具や地鎮後の鎮壇供養に用いられた^{りんぼう}輪宝などの密教法具の鎮壇具 135 点がある。



金剛峯寺境内出土の地鎮・鎮壇具

【^{とよとみ け ぼしよ}豊臣家墓所】（県指定記念物 史跡）

奥之院の参道左手の高台にある豊臣家の墓所。当初は秀吉自身の^{ぎやくしゆせきとう}逆修石塔もあったとされているが、現在判明しているものは、秀吉の母と弟、秀次の母、秀長の父、秀吉の長男^{つるまつ}鶴松丸、淀君の石塔である。この豊臣家一族の墓所の建立が起因となり、奥之院に諸大名の墓所が建立されるようになった。



豊臣家墓所

【^{こうらいじんてき みかたせん しやくようひ}高麗陣敵味方戦死者供養碑】（県指定記念物 史跡）

この碑は、慶長 4 年（1599）に薩摩の島津義弘・忠恒の父子によって、秀吉の朝鮮出兵によって戦死した敵味方の霊を慰めるため奥之院にある島津家の墓所の一角に建立された。石碑は、砂岩製の位牌形で総高 385 cm、幅 81.8 cm。



高麗陣敵味方戦死者供養碑

【^{すうげん ふじん ごりんせきとう}崇源夫人五輪石塔】（県指定記念物 史跡）

徳川秀忠夫人の崇源院の追善のため、徳川^{ただなが}忠長が寛永 4 年（1627）に建立した花崗岩製の五輪塔。総高 6.6m の巨大な石塔で、高野山で最も大きい石塔であることから「一番石塔」とも呼ばれる。



崇源夫人五輪石塔

【^{おく いん おおすぎばやし}奥の院の大杉林】（県指定記念物 天然記念物）

約 2 km の奥之院参道両側には多くの樹木がみられる。そのうち一番多いのが杉で約千数百本ある。最大のものは高さ約 37m、胸高周囲約 7.5m、樹齢は約 500 年と推定されている。永年にわたって保護され、樹勢も良好である。



奥の院の大杉林

(4) 町指定の文化財

【高野山女人道】(町指定 史跡)

高野山への立ち入りを禁止された女人のため高野七口の女人堂と高野三山を巡るため高野山を囲む峰々を巡る参詣道。高野参詣道の女人道として国の史跡に指定されていない区間を町の史跡として指定し保護を図っている。



高野山女人道

【御室御陵 (静覚入道親王の墓所) 伝承地】(町指定 史跡)

仁和寺第 18 世門跡である静覚入道親王の墓所として花坂地域で伝えられてきた土地。静覚入道親王が寂した文亀 3 年 (1503) を示した紀年銘のある一石五輪塔が残される。



御室御陵伝承地

(5) 主な未指定文化財

【奥院不動堂】(未指定 建造物)

奥之院の御廟橋手前の参道右手にある桁行五間、梁間五間入母屋造檜皮葺の不動堂。棟札から文化 9 年 (1812) に建立されたことが分かる。内部は変則的な平面で、向かって左手三間分を仏堂風の仏間とし、右手二間を位牌壇風の仏間としている。



奥院不動堂

【金輪塔】(未指定 建造物)

『紀伊続風土記』によると明德 5 年 (1394) に創建されたとされる。現在の建物は、天保 5 年 (1834) に再建されたものであり、方三間の檜皮葺の多宝塔。寛治年間 (1087~1094) に高野山の中興に尽くした明算大徳めいざんだいとくの遺骨をこの塔の下に収めたと伝えられる。



金輪塔

【念仏鉦】(未指定 工芸品)

高野山山麓一帯では、鉦を打ちながら「なむあみだぶつ」を繰り返し唱える六斎念仏ろくさいねんぶつが伝えられ、盆や葬式の際に念仏講の人々によって唱えられてきた。そのため高野山の周辺の集落では、多くの念仏鉦が残り、永禄 6 年 (1563) の銘を持つ中世の鉦もみられる。



念仏鉦

(6) 特産品、伝統的技術、工芸品、料理

①特産品

【胡麻豆腐】

胡麻豆腐の来歴は明らかではないが、精進料理の一品として寺院で作られてきたと考えられている。明治時代以降は商家でも製造されるようになった。近代以降の参拝客の増加と共に需要が増し、機械化・大量生産等が可能となり、現在では高野山を代表する土産物の一つとなっている。



【高野槇】

高野山は寒冷地であるため花々の成育には不向きであり、そのため仏前等への供花として用いられてきた。その名が示す通り、高野山に多く成育していることから名付けられた。性質としては水に強く、社寺建築用材として用いられ、「高野六木」のひとつとして金剛峯寺により保護成育されるほか、各家の供花等信仰に基づく産物として成育されている。



②伝統的技術

【檜皮葺ひわだぶき】

檜の皮を何層も重ねて屋根を葺く工法。特徴は、瓦や金属よりも軽く、樹皮の油で水をはじく。高野山の寺院にもよく用いられ、何層にも重なった檜皮が生み出す重厚感と軒先へ伸びる曲線の優雅さが共存する。



【高野紙こうぼうだい し ぎょうじょう え ことば】

14世紀に作られた『弘法大師行状絵詞』に高野山麓で紙漉きが行われている情景が描かれており、古くから高野山麓に生育するコウゾを原料とし、高野山麓の数集落で、冬場の収入源として製造されてきた。小川町（埼玉県比企郡）及び東秩父村（埼玉県秩父郡）のホームページによると、ユネスコの無形文化遺産に登録された埼玉県の細川紙は、江戸時代に当地で漉かれていた細川奉書の技術が伝わったといわれている。傘紙への需要が減ったため、一時は途絶えかけたが、伝統を継承するため、地元細川地区の人々によって製造技法が継承されている。



③工芸品

【位牌】

高野位牌の製造は、江戸時代から杖ヶ藪地区で始まった。木地、下地、塗り、文字彫刻等の工程を専門の職人の技術により仕上げられる。骨のぼせ（葬送儀礼）に代表される先祖供養の風習・文化を象徴する高野位牌に関わる技術は高野山の職人に引き継がれている。



④料理

【精進料理】

一般に鳥獣肉や魚介類と五葷（にら・にんにく・らっきょう・あさつき・ねぎ）と呼ばれる香りの強い野菜などの食材を用いない料理。仏教戒律に基づく料理であり、現在宿坊等で提供される精進料理は室町時代に完成された饗応的性格を備える本膳料理の形式を持つ。高野山の精進料理は宗教儀礼後に執行者を労う振舞料理とも呼ばれる。



今日の高野山精進料理に欠かせない食材として全国的知名度を誇る高野豆腐がある。別名「凍り豆腐」とも呼ばれ、近代初頭頃までは高野山や周辺村落でも製造されていた。